

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

魔法先生ネギま！描かれる物語

【作者名】

びーびー

【あらすじ】

絵を描き、そして傷を負い居場所を失った少年は、逃げてきた麻帆良の中で見つけた居場所で再び筆をとった。

これは心に傷を抱えたままの少年が麻帆良という地で描くやさしい物語。

リハビリのつもりでのんびり書くので更新速度はお察しく下さい。

感想お待ちしています。

第一話 猫人間

真は夢を見ていた。

時々見る夢で、決まってこの夢を見るときは、これが夢だとわかっている、そんな夢を。

夢の中では、何人もの顔も見えない影が昔の真をてしゃべっている。

あの子でしょ？例の……

怖いよ

不気味

あっちいけ

一つ言葉が聞こえることに夢の中の真は表情をなくしてその場から走り出す。

悪意などないのかもしれない

人は自分とは違う未知を恐怖すると最近になって知った。

でもだからと言って、悪意がないからといって傷つかないなんてことはなく。

友達は消え、次第に家族すらも信じられなくなっていき、そうなって逃げるように家を出た。

家族には引き留められたが、それよりもどこか自分のことを知っている人が誰もいないところに行きたくて、ただそれだけで頭の中はいっぱいだった。

そして夢は終わる、いつも通りに終わる。

この夢は逃げ出した先を描いておらず、いつも決まったところまで来ると終わってしまうのだ。

いつも通りに、目覚ましの音が聞こえる……

突然鳴り出した電子音に顔を伏せたまま、霞がかつた意識でその音の発信源を探す。

二度、三度と右手を振り回すことで捕まえた目覚ましのアラーム音をやや乱暴な動きで停止させちらりと目覚まし時計の指し示す時間を確認し、

「あー……」

と絞り出すように声を上げる。

学生にとって、平日の朝を告げる目覚ましとは憂鬱なものだ。

ましてや、あの夢を見た真はいつもにもまして憂鬱な気分になる。

しかし憂鬱だと言って、いつまでも布団にくるまっていてはわけにもいかず、少しでも気を抜くと再び布団の中に倒れこみそうな体を無理やりに起こして登校の準備をする。

準備といっても顔を洗って、着替えるくらいなものであとは鞆さえ持てば準備はすむ。

一人暮らしを始めた当初は、しっかりと朝ごはんの支度もやっていたが、だんだんと朝の睡眠時間が幅を利かせはじめ、今ではほぼ食べないか、食べたとしても登校途中のコンビニでパンを買ってくるくらいなものだった。

「行ってきます」

返ってこない挨拶をポツリとつぶやき、画材道具以外あまりモノがない自分の部屋を後にする。

麻帆良学園という学園都市の登校の時間ということもあり、多くの学生が行きかう道を、自分の学校へ向けて歩いていく途中、普通ではありえないような巨大な樹が見えてくる。

「もうだいぶ涼しくなってきたな」

季節は初秋、10月となり激しかった残暑も落ち着きを見せ、最近では夜は半そででは少し肌寒くなっている。

本来なら紅葉なども始まり始める季節であるが、麻帆良の世界樹と呼ばれるそれはいつもの通りに枝に青々とした葉をつけている。

その大きさから普通に考えればギネス記録になったり、世界的な観光地になったりと常識外の大きさであったが、今までそうだったこと

はないし、麻帆良の人々も「大きいよね」で終わってしまう。

まるであれがどれほど異常なことかわかっていないような答えだ。

ほかにもこの街には異常があふれている。

車より速く走る学生、人が文字通り吹き飛んでいく喧嘩、ありえないほど進んでいる科学部の発明品、エトセトラエトセトラ。

この街は異常だと真は思っている。

でも、この街のそんなところに安心を感じてしまう自分がいることもわかっていた。

普通に生きていたら絶対に遭遇しないであろうことがこの街にはあふれていて、ほとんどの人がそれを常識の範囲内のことだと思っている。

かつて異常だと周囲から排斥された真にとって異常を異常と思わず、排斥しようとしないうこの街はようやく見つけた居場所だった。

世界樹を見て気分を良くした真は、夢のせいでだるかった体にも力が戻ってくるのを感じた。

「今日もいい天気だ」

こうやって普通に登校ができるというところが何ともうれしく感じる。

今までずっと望んでいた日常が確かにこの街(非日常)にはあった。だからこそ真は願う。

願わくばこの非日常(日常)が続きますように。

「おっすー、まっちゃん」

「おはよう、浩輔」

教室につき、挨拶もそこそこに席に着くと髪を茶色に染めた少年、浩輔が声をかけながら近寄ってくる。

浩輔は真が麻帆良に転校してきたばかりでまだ棘があった時から付き合いで、どんなに邪険に扱っても笑いながら話しかけてきたクラスメートだった。

多少女好きなところがたまに傷だが、それ以上に真は浩輔に会えたことに感謝している。

「まごちゃんはよせて言ってるだろ」

「わかってるって、ちよっとした気分の問題だよ。それより昨日の場所はとうだった？」

「ああ、よかったよ、路地裏にあんな喫茶店があるとはね。」

そついいながら鞆から1冊のスケッチブックを取り出す。

浩輔の言っている場所というのは、普段から真が浩輔やほかの何人かに頼んでいることで、おすすめの景色などがあったら教えてほしいというものだ。

転校してきた真と違って地元民の浩輔たちはこの街に詳しく、表通りだけではないいわゆる穴場といわれる場所を教えてください。

昨日真が教えてもらった場所もその穴場というもので、路地裏にたずむオープンテラスの喫茶店だった。

光と影のコントラストが本来の麻帆良の洋風の街並みを際立たせ、また路地裏にひっそりとたたずむ喫茶店があることで物語の一つの風景のような幻想的な雰囲気を放っている場所だった。

「だろ、俺のデートプランの主役なんだよ、あそこ。どれどれどんな感じよ？」

「どおりでカップルが多いと思ったよ。」

昨日の喫茶店で味わった妙な居心地の悪さを思い出し苦笑しながら手に持っていたスケッチブックを浩輔に渡す。

浩輔に渡したスケッチブックには今まで紹介された風景や自分が見つけた風景などが描かれている。

この絵が浩輔たちにいるいろんな場所を紹介してもらっている原因であり、真がこの街にやってきた原因でもある。

昔はそれこそ常に絵のことを考えていた。

描きたいという自分の気持ちに従い、時間の許す限り絵をかいていた。

ただ、あることがあって、真は居場所を失って、逃げるようにこの街にやってきた。

もちろんこの街にやってきた直後は一度と絵なんて描かないと思っていた。

絵を描けば、またあの時と同じことになってしまつかもしれないと絵を描くことをやめようとした真は自分のことを勘違いしていた。

辞められるはずがなかったのだ。

人は空気がないと呼吸できずに苦しんで死んでいく。

真にとつて絵を描くことは呼吸することと同等だった。

実際麻帆良に来たばかりの真はだんだんと衰弱していき、そしてある日倒れた。

寝ても覚めても絵を描くことを主張する本能とそれを抑えようとする理性がせめぎあつ中でまともな生活を送れるはずもなく、ある時は寝ているときに筆を持つとうとしていたことに気づいてからは夜も満足に寝れずに、そして倒れた。

だから真はほんの少し、妥協した。

なにより体調管理ができないという理由で家に連れ戻されることを恐れたため条件を付けて自分が絵を描くことを許した。

それからはとりあえず倒れずにやってこれている。

「しかし、いつも思っただけでお前の絵って人の姿がなくないか？この絵だって、昨日は日曜だし、オブンテ ラスにカップルの一組や二組くらいいてもおかしくないのに」

「あぁ……まぁ、ね」

人は描かない

そのルールを決めて、真は麻帆良に来てから今日までやってきた。もう昔のような思いはしないように、絵を描くことは許しても、こ

れだけは守ってやってきた。

「口ごもったことに何かを感じたのか浩輔は軽く笑い顔の前で手を振る。

「いいよ、別に。言いたくないことの一つや二つは誰にでもあるわ」

「ああ……悪いな」

「気にすんなよ、お前が謝るとか天変地異の前触れだぜ」

「その言い方だと俺が謝るのが珍しいみたいじゃないか」

笑つ浩輔を半眼になつてにらむ。

「悪い、悪い。まあ、お詫びと言っちゃなんだが、今日もポイントを教えてやるぜ。」

「ああ、それで手を打とう」

「またずいぶん上から目線ですわねえ」

「それで、どのあたりなんだ？」

そつ言いながら麻帆良の地図を取り出す。

「無視かい……まあいいけど」

そつ言いながら浩輔は広げた地図のある個所を示す。

「真、猫は好きかい？」

「しかし本当にこつちなのか？」

その日の放課後、浩輔に教えられた場所に向かって歩きながらぼそりつつぶやく。

あの時、「普通……かな？」と答えた真に対して苦笑いしながら浩輔が教えた場所は学園の中でも女子学部エリアの近くにあり、そこに向かって歩いていくとなると必然的に女性が多くなっていく。

そんな中で男子学部高等部の制服を着た真の姿は悪目立ちをしていた。

「まったく、いつも樹のかさとかそついつ目に見える異常は気にし

ないんだから男一人くらい気にすんなよ。

……というかこの森を突っ切るのか？」

そういいながら手元の地図を見ると、そこに描かれた目的地は確かに森の中の一点を指していた。

どうやらちゃんとした道もあるようだがその道はどちらも女子学部エリアにつながっている。

「女子学部エリアに入っていない段階でこれなんだから、もし入ったら通報されるかも」

現に女子学部エリアに近づくにつれて真のことを監視するような視線は増えており、さらに加えて先ほどから眼鏡をかけた女子中等部の生徒が真に強い視線を送っていた。

「まあ目的地は女子学部エリアじゃないしそこを通らなければ大丈夫だろ」

監視されているかのような視線の多さに怖気づいた真は言い訳のような言葉を残し、覚悟を決めて森の中へ分け入っていく。

そこは森の中にぽっかりと空いた空洞だった。

ベンチが設置されていることから人の手で作られたことは確かだが、そもそも人の通らない道の途中に設置されているためか人の気配というものが薄く、また森という命の塊の中に存在する空白の空間は森の中にありながら、いや森の中にあるからこそその静寂さを際立てる。

木々の木漏れ日が照らすそこは遺跡のような一種の神聖ささえ醸し出しているようだった。

その光景に目を奪われていた真は騒ぎ立てる心を落ち着けるように静かに鞆を開き、スケッチブックと画材を取り出す。

「ふう」

綺麗だ、美しいだと言葉を発することはこの空気を壊してまうと考え、意識を切り替えるかのようにひとつ息を吐き、ただ静かにスケッチブックに筆を走らせ、世界を創っていく。

木々の葉の一枚一枚の溢れんばかりの生命を、その葉を支える枝や

幹の静かさを、木漏れ日のやさしさを、忘れられたようにあるベンチの哀しさを、その空間の中を流れる風の輝きさえもを真はスケッチブックという小さな小さな紙の中に描き、一つの世界を創りだしていった。

時には異なる色を重ね、時には同じ色の濃淡で、静かにしかしその手は次をどうすればいいのかわっているかのように止まることなく動き続ける。

……どれくらい時間がたったのだろうか、ついた当初はまだ高かった太陽もだいぶ低くなり、柔らかな優しい光で包まれていたその場所は、今では秋という季節と同じような憂いを含んだ色に染まり、心地よかった風に寒さを感じるようになっていた。

「ふうふう……」

まるで最初に息を吐いてそこから呼吸を今まで止めていたかのような長い呼吸のあと真は筆を置く。

一つの世界を創りだした後の充実感とともに倦怠感が真を襲い、それに抗うことなく視線は「世界」から離すことなく座っていたベンチの背もたれに背を預け脱力する。

「……あの」

そのまま言葉を発することなく、ただ自分が書き上げた絵を見つめる真の思考にノイズが走る。

真にとつての至福の瞬間を邪魔されたことに若干の苛立ちを感じながらも声のする方向を向けるとそこに飛び込んできたのは全身のいたるところに猫を乗せた少女？らしき人物であった。

「この子たちをどこかすのを手伝っていただけないでしょうか？」

「ね、猫人間……」

こんな間抜けなやり取りが真と絡繰茶々丸の出会いだった。

第二話 森の中での出会い

「あつ、」らっ、爪を立てるんじゃない」

真の手を嫌がり乗っている少女の制服に爪を立てようとする猫をひよひよいとつまみ下ろしながら真はこうなった経緯を考えていた。

少女が声をかけ、それに真が妙な言葉を返してから見つめあうこと数秒、猫まみれの少女という見かけから受けた衝撃も収まった真は意を決して少女に声をかける。

「あー、猫を取ってくれてっていうのは君の肩やら頭やらに乗っている猫を下してくれってことか？」

はい、と少女は感情のこもらぬ声で返事をする。

「」のままだと夕食を作る時間に遅れてしまいます」

確かに少女の言葉の通り、猫にまとわりつかれた少女は動くこともままならずこれからどこかへ行くことも難しい状況なのはよくわかる。

「それは自分じゃできないのか？」

「はい、私は作られてまだそれほど立っていないので力加減がよくわからないのです。昨日も力加減を誤り、猫に怪我をさせてしまいました」

「そうか……って作られた？」

「はい、私はガノイドと呼ばれるもので起動したのは3か月ほど前となります」

「ガノイドって、つまりロボットってことか？」

はい、と答える少女の顔をまじまじと見てしまふ。

よくよく見ると、耳の飾り(パーツ)や無表情なところがロボット、少女が言つところのガノイドらしさを垣間見せてはいるがそれ以外

はまったくもって普通の少女のように見える。

「はい、と感嘆の声をあげながら真は少女に近づいていく。

麻帆良に来たばかりの真であったのなら人間と見間違えるほどのロボットが存在していることに、もっと驚いたりしたのかもしれないが、この麻帆良という街に住んでいるうちに真は変わっていた。

慣れたといってもいいのかもしれない。

「なるほどな。俺は高等部1年の清水真だ、よろしく」

「はい。中等部1年A組の絡繰茶々丸と申します」

必要以上に驚かずこうして普通に挨拶をかわす程度には真はこの街に慣れていた。

「じゃあ猫をどかすから動くな」

「はい、お願いします」

普通ここまで人が近づいたら野良猫は逃げるはずだが、ここにいる猫たちは茶々丸という少女の体の上や足元で自由にくつろいでいた。

「よくくつろいでるな、だいぶ懐かれてる」

「そう、でしょうが」

「まあ普通は野良猫は人にはあまり寄ってこないからな」

真は昔、猫をスケッチしようとして野良猫を追い掛け回したことを思い出しながらひよいひよいと猫をつかんで地面に下す。

「よくくつろげるのか？」

「これで二回目です。以前ここで弱った子猫を見つけたときに餌を与え、それからたまに来ていたのですが、猫が登ってくるようになったのは最近のことです」

最初は猫をどかすことができずに、立ち去るまでここに座っていて、その後茶々丸がマスターと呼ぶ人物に怒られたこと、2回目は以前に怒られたために猫をどかそうとして力加減を誤り怪我をさせてしまったと茶々丸は言葉少なに語った。

猫の中には茶々丸の制服に爪を立ててまで抵抗する者もいたが、何とか全ての猫を茶々丸の体から取ることができた。

「ほら、もう行った行った」

その言葉に名残惜しそうな鳴き声を上げながら猫は森の中に去っていく。

「ありがとうございます」

猫を見送っていた真の背中にそつと声がかけられる。

「いや、これくらい。困っている人を助けるのは当然だろ」

「ありがとうございます」

そつ言って頭を下げる茶々丸を真は困ったような顔で見下ろす。

そもそもここまで丁寧に感謝されたことなど真にはなく、その相手が年下との少女ということが真の対応を難しくしていた。

それこそ「サンキュー」「あいよ」といったものが主だった中で突然深く頭を下げられては相手にかける言葉も見つからず困り果てていた。

「ほ、ほら時間がないんだろ」

その結果口から出るのは話題をそらす言葉であるがこの場ではそれが正解だったのかもしれない。

「はい。それでは失礼いたします、清水さん」

そつ言って再び頭を軽く下げ茶々丸は踵を返す。

「あっ、そつだ、絡繰ー」

その背中に向け真は思い出したように声をかける。

「はいっ」

「ちよっと手を出してくれ」

「手、ですか？」

「ああ」

その真の言葉に従い軽く挙げられた茶々丸の手を真は躊躇なく右手で軽く包んだ。

「清水さん？」

「……「これくらいだ」

表情は変わらず無表情だが、問いかけるように声をかけてくる茶々丸に、真は手を握ったまま答える。

「猫は「このくらい」の力でつかむといいぞ」

そつ言って真は手を離す。

茶々丸は真に掴まれた手を開いたり閉じたりしながら、その力の強さを覚えようとしているようだった。

「また来た時に同じことになったら困るからな」

その茶々丸の様子を見て今更自分がやったことが恥ずかしくなった真は耳を少し赤くしながら言い訳のようにそれだけ言って立ち去ろうとする。

「じゃあな」

真はそれだけを言って足早に男子寮がある方向へ歩き出す。

心中では唐突な自分の恥ずかしい行動に悶絶しながらも、茶々丸の手の暖かさや柔らかさを思い出し、それによりさらに赤くなる顔を隠すための行動だった。

「清水さん、ありがとうございます」

背後からかかる茶々丸の声に軽く手を振り真はその場を後にした。

茶々丸は真が立ち去った森へ軽く頭を下げ、そして再び真に握られた手を見て広場からつながる道を歩いていく。

第三話 従者と主人

「マスター、今日の放課後はいかがなさいますか？」

「今日は爺に呼ばれているからな、先に帰っている」

茶々丸の問いかけにエヴァンジェリンは鼻を鳴らし、つまらなそうに答える。

茶々丸が起動してから3か月ほど経ったが、いまだに毎日定型文のように決まった言葉を同じタイミングで尋ねてくる新しい自分の従者にエヴァンジェリンは内心の溜息を隠しながら新しい従者とその姉との違いを考える。

(やはり、機械と魔法を詰め込んだからか成長が遅いか？チャチャゼロの時はもう少し、うっ……)

エヴァンジェリンの頭の中に今は満足に動けない古い従者の姿が浮かびケケケと考える自分をあざ笑い、消えていく。

(いや、あいつはもともとあんな感じだったな。どうしてこうも両極端なのか)

方や人形とは思えないほど感情豊かな皮肉屋で、もう片方は姿かたちは限りなく人に近いがその内面はまさにロボットという状態。

「マスター？」

問いかけるような茶々丸の声にエヴァンジェリンは埋没しかかった自らの思考を引き上げる。

目の前の茶々丸は変わらぬ表情で突然黙り込んだエヴァンジェリンを見ている。

(まあ、こいつが家に来てまだ3か月弱しか経っていないからな、その辺はおいおいと
いったところか)

自分の考えがどことなく保護者のようになっていて、
そんな自分に苦笑

いを浮かべながら今も変わらぬ表情を浮かべる従者に首を振って
こたえる。

「何でもない。今日は時間がかかりそうだから先に帰っている」

「かしこまりました」

そう言うと茶々丸は頭を軽く下げ、エヴァンジェリンの向かってい
る方向とは別の方向に歩いていく。

一般常識や地理などはすでにデータとして入っていると、茶々丸の
製作者は言っていたことを思い出すが、エヴァンジェリンは今の茶々
丸に子供を見ているような危うさを感じていた。

（超はいずれ心も成長していくとが言っていたが、いったいいつに
なるんだか）

いつの間にか再びあらわれた保護者のような考えを頭を軽く振る
ことで追い払い、学園長室に向けて歩き出す。

「……スター、マスター」

遠くから聞こえる自らを呼ぶ従者の声にエヴァンジェリンは閉じ
ていた目を開き、布団に預けていた上半身を起こす。

放課後、茶々丸と別れた後学園長室で用件を済ませ帰宅したエヴァ
ンジェリンはいつもならずで帰宅しているはずの彼女が帰ってい
ないことを訝しみながらも、襲い掛かる眠気に負けベッドに身を預
け、そして今に至る。

「申し訳ありません、帰宅が遅れました」

「む？」

目をこすりながら自分の従者に目を向けると茶々丸は深く頭を下
げそう言った。

確かに今の時間はいつもの帰宅時間からは考えるとだいぶ遅れて
いた。

「何か、あったのか？」

「いえ、猫が……」

エヴァンジェリンはいまだに自分には敵が多いことをわかっており、またそれを改善しようとはしていなかった。

そのため麻帆良内にもエヴァンジェリンをよく思わない人間は多く、茶々丸の帰宅の遅れもそのような輩に絡まれた可能性を考える、エヴァンジェリンの耳に予想もしない言葉が飛び込んでくる。

「ね、猫？」

予想の斜め上からの言葉に驚きながらも、茶々丸から事のあらましを聞いた彼女はこみあげてくる笑いを抑えきれなかった。

野良猫に餌をやっていたら体に乗られ動けなくなったから帰宅が遅れたことを淡々と話す茶々丸を馬鹿にするような笑いではなく、普段彼女がする闇の福音としての、己の誇りを轟かせるような笑いとも異なり、例えるなら母親が愛する子供が一生懸命に話す冒険譚を聞いているようなそんな優しい笑いだった。

野良猫に餌をやるといった行動を自分の考えで行ったこと。

猫が体に乗ってきたため動けなくなってしまったこと。

従者としては失格なのかもしれないが、エヴァンジェリンは今日だけはこの従者の行動を肯定した。

まだ芽生えるには遠いと思っていた心の芽の存在を感じ、エヴァンジェリンは笑いをこぼす。

「マスター？」

「なに、面白いものを見せてもらったからな、今日のことは不問にしよう。」

もういいぞ、という風に手を振るエヴァンジェリンに、それでは夕飯の支度と言って茶々丸はエヴァンジェリンの部屋から出ていく。

部屋から出ていく茶々丸の後ろ姿を見ながら、エヴァンジェリンは少し前まで自分の中にあった鬱屈した気持ちが多少ではあるが軽くなっていることを感じていた。

「少しは面白くなるかもな」
彼女のその言葉が正鵠を得ていると気づくのにそんなに時間はいらなかった。

「遅い」

数日後、エヴァンジェリンは額に青筋を浮かべいつまでたっても帰ってこない自分の従者を待っていた。

今日は茶々丸がメンテナンスのため、大学等の研究施設に行くということでエヴァンジェリンは一人で帰宅していた。

おそらくは今日も猫どもに餌をやりに行くのだろうと考え、別れ際に茶々丸に「多少なら遅れても構わん」と言って別れてきた。

先日の茶々丸の餌やり騒動の後、「もう餌やりはやめます」と茶々丸は言ったがエヴァンジェリンはそれを禁止せず、逆に奨励した。

「お前は確かに私の従者だが、私はお前に自由を認めないわけではない。四六時中共にいろとは言わんし、お前がいなければ何もできないほど私も子供ではない。」

それに、とエヴァンジェリンは続ける。

「私の従者たるもの言われたことのみをこなすような奴はいらん。自分で考え、率先して行動するような者となれ」

そこまで言ってエヴァンジェリンは彼女の言葉を黙って聞いている茶々丸に対してにやりと笑う。

「お前のそれは良い経験になるだろうよ」

最初のうちはエヴァンジェリンも余裕をもって自分の従者を待っていたが、いつまでたっても帰ってこない茶々丸に、彼女の我慢は限界に達しようとしていた。

彼女の額の青筋には、単純に帰ってこない茶々丸に対する怒りとともに、考えて動けなかったにも関わらず同じことを繰り返す茶々丸に対する失望も含まれていた。

(やはりまだまだか……)

そうこうしている内に玄関のドアが開く音がなり、まさに彼女が考えていた少女、茶々丸が遅くなりましたと言って入ってくる。

「遅いぞ、茶々ま……」

「お邪魔するヨ、エヴァンジェリン」

彼女にとって予想外の客、茶々丸の製作者の一人にしてエヴァンジェリンたちのクラスメイトの一人である超鈴音を伴って。

出鼻を挫かれ不愉快そうに鼻を鳴らす彼女に、超は胡散臭い笑みを浮かべエヴァンジェリンの対面のソファに腰を下ろす。

「招待をしたつもりはないが？」

「まあ、まずは話を聞いてほしいヨ」

そう話す超の顔を見ながら以前彼女が魔法関係者にはあまりにらまれたくないと言っていたことをエヴァンジェリンは思い出す。

そう考える彼女がよりによって闇の福音たる自分の家に訪れてまで話したいという話の内容にエヴァンジェリンは興味を覚える。

「まあいいだろう。茶々丸、飲み物を頼む」

「私は紅茶がいいネ」

「かしこまりました」

そう言っけてキッチンの方に向かう茶々丸を横目で見送り、視線で話を始めるように促す。

「そうネ、まずメンテナンスは無事終了したヨ。特に問題もなしヨ」

「そうか」

エヴァンジェリンは建前のような超の報告を一言で切って捨てる。そんな様子に超はやれやれといった風に首をふり先ほどまでの柔らかな雰囲気を一変させる。

「今日、メンテナンスを終えて帰った茶々丸からエマージェンシーコールがあったヨ」

「エマージェンシー……なんだそれは」

「何かあった時のためにつけておいたものヨ。私宛につながる緊急用の電話といったものネ」

それは置いておいてと超は続ける。

茶々丸のもとへ駆けつけた超が見たのは森の中で月光に照らされる広場のベンチに座る茶々丸であり、その膝の上には口から血を流した後のある子猫が横たわっていた。

「幸いなことに、猫は無事だったヨ。今は私の研究室で寝ているネ」
そこまで超が話したところで茶々丸がトレイを持ってリビングに入ってくる。

表情に変化は見られないが、心なしか落ち込んでいるようにも見える。

肩に乗った猫をどかそうとした際に、それに驚いて肩から落ちた猫を受け止めようとしたが、咄嗟のことで力加減を間違えたみたいネと超は語る。

「そんなわけで遅れたネ、あまり叱らないでやって欲しいヨ」
それと、と超は続ける。

「茶々丸からエヴァンジェリンはなるべく餌やりに行くように言っていると聞いたヨ。もちろんあなたは何を思っているかはなんとなくわかるが、そこをまげて頼むヨ。」

そこでいったん言葉を切り、超はエヴァンジェリンの顔を見る。

「しばらくはあそこには行かない方が良い」

心は非常に繊細なものだ。

もちろん心が芽生え始めたことは嬉しいことだが、急いで成長させようとしても心にとってはよくない。

生まれたての心は弱く、もろい。

今回のようなことがまたあれば、芽生えたばかりの心は消えない傷を負うかもしれない。いやすでに負っているかもしれない。

だからこそ、いったんあの場所から遠ざけ、時間をおいてほしい。

押し黙り、超の話を聞くエヴァンジェリンに超はそう語った。

「……茶々丸」

「はい、マスター」

エヴァンジェリンは軽く顔を傾け茶々丸の方を向く。

「私は言ったはずだ。お前の行動を縛りはしないと。そして、自分で考えて行動しろと」

「……はい」

数瞬の間をおいて答えた茶々丸の言葉に満足したようにエヴァンジェリンは席を立ち、超を見下ろす。

「超、聞いた通りだ」

「やれやれ、ずいぶんとスパルタなご主人さまネ」

そう言つとあきれたような笑みを浮かべ、超もまた席を立つ。

そして最後に確かめるように茶々丸の顔を見る。

「茶々丸、あまり無理はしないでほしいネ」

「はい、超」

超はその答えに満足するようにつつ頷き玄関に向けて歩き出す。

数歩、歩いたところで今度は顔だけを茶々丸のほうへ向けからかうように笑つ。

「ご主人様に愛想が尽きたら私のラボに来るといいヨ。助手はいつでも募集中ネ」

その超の言葉に茶々丸はゆっくりと首を横に振る。

言葉はなかったが、その動作が茶々丸の思いを何よりもあらわしていた。

その様子に再び超は笑みを浮かべエヴァンジェリンの方へと顔を向ける。

「どづかねエヴァンジェリン。主人冥利に尽きるだろウ？」

「ふん、いいから貴様はさっさと帰れ」

「おお、怖い怖い」

そう言つて笑いながら超はエヴァンジェリンの家を後にする。

思ったよりもずっと大事にされている自分の作品（娘）の今に満足しながら、そして伝え聞くより、ずっとやさしさにあふれた吸血鬼に笑みをこぼしながら超は寮への道を歩いていく。

その笑みは先ほどまでの胡散臭い笑みではなく、年相応の柔らかい笑みだった。

(どっすればいいのしょうか?)
体中に猫を乗せながら茶々丸は考える。

用事があると言って彼女の主と別れた後買い物を終え、気付いたら彼女は再び森の中の広場への道を歩いていて。

手の中の買い物袋には数日前と同じようにキャットフードの缶が入っていた。

好きなものを買えと毎月彼女の主から渡されるお金の使い道は貯金か、このような猫の餌に消えることが多い。

あの日から数日、どっすればいいのか彼女の中に明確な答えはないが、自分にもよくわからない気持ちに従い茶々丸は広場に向かっていった。

広場に近づくに従い回転数を上げる彼女の胸の奥にある機械仕掛けの魔力炉にチェックプログラムを走らせるが返ってくるのは原因不明というエラーコードのみ。

彼女を急ぎ立てるものは何かと百人に聞けば百人が好きだからと答えるだろうが、茶々丸にはそのことが理解できず、またそれをするにはいまだ経験が足らなかった。

茶々丸の中に入れられた一般常識が、感情や心を持つロボットは存在しないという常識が皮肉にも彼女の心の成長を邪魔しているのだが、それは製作者である超たちにも完全に盲点の事実であった。

(いずれこのエラーの意味が分かるでしょうか?)

エヴァンジェリンや超が期待している心を得ればわかるかもしれないがそんなことができるのかと考えると行動に制限がかかったように足取りが重くなる。

そうこうしているうちに広場にたどり着いた茶々丸の視界に入ってきたのはいつもの広場とベンチ、そしてそのベンチに座りスケッチブックに対して一心不乱に筆を動かす黒髪の青年だった。

傍から見てもとても楽しそうに筆を動かすその少年、真は歩いてきた茶々丸に気づく様子もなくスケッチブックに向かっている。

茶々丸は真に目を向け、その邪魔にならないように広場の端のベン

ちに座りキャットフードを取り出すとそれにつられたように猫が集まってくる。

そしてまた、よじ登ってくる猫を拒めずに、猫まみれになってしま

う。何度か猫を下ろそうとつかもつとしたのだが、原因不明のエラーがその手の動きを止めてしまう。

(どっすればいいのじゃようか)

このままでは今日も夕食の時間に間に合わなくなってしまい、また考えると言ったマスターの期待を裏切ってしまうと考えたと茶々丸は胸の奥に今まで感じたことのない、締め付けるような痛みを感じる。

その茶々丸の視界の片隅で先ほどの少年が深く息をつき筆を置くのが見えた。

「あの……」

エヴァンジェリンの求める答えはまだ出ていないが、遅れるよりはと真に声をかけた茶々丸の耳に聞こえてきたのは「猫人間」という意味不明な一言だった。

「ただいま戻りました」

エヴァンジェリンはそう言って帰宅した自分の従者にちらりと目を向ける。

自分より遅く帰ってきたということは今日もまた猫に餌をやりと言っていたのだろうとあたりをつけながらも、今までよりははずいぶん早く帰ってきたことに自分の心配は杞憂だったかと考える。

超にああは言ったが、エヴァンジェリンももちろん心のもろさは知っており、もしかしたら猫をどかせず今日も帰宅が遅くなるのではと考え、最悪迎えに行くことも考えていた。

しかし、茶々丸は、多少遅くなったもの十分許容範囲の時間に自力で帰宅した。

自分の従者が自分の想像を上回ったことに、彼女は自分の口角が上

がるの感じた。

「マスター？」

問いかけてくる茶々丸に口に浮かぶ笑みを深くしエヴァンジェリンは答える。

以前、楽しくなりそうだと考えたことは間違いなかったと思いながら答える。

「お帰り茶々丸」

第四話 再び、森の中で

「そつだ、猫、描こつ」

「え？突然何？京都、行く？」

「いや、CMの話じゃなくて、ほらこの間教えてもらったあの広場だよ」

放課後の雑談中に突然始まった真の某旅行会社のキャッチコピーをもじった宣言に一緒に話していた浩輔は目を白黒させながらもその真意を問いただす。

真が言う広場とは以前浩輔が真に教えた森の中の広場で、わかりやすく言えば真と茶々丸が出会った広場のことだった。

そもそもこの広場を真に紹介した浩輔の言葉では、飼われているものの、野良猫を問わず多くの猫が森の中の広場に集まっており、そのほとんどが人なれをしており近づいても逃げないというものだった。

広場自体の美しさや茶々丸と出会ったことでのいろいろと忘れていた真ではあるが、あの広場に行った目的には生の猫を間近で描くことも入っていた。

実際の所は、近づいてくる茶々丸の気配に気づいた猫がそちらの方にむかってしまっていたため真が広場に着いた時そこには文字通り猫の子一匹もいなかったわけだった。

「やっぱりそつだ、そつしよつ」

「ああ、あそこの広場ね。確かに絵を見たときに猫がいらないなと思っただよ」

「とついうわけだから、今日はもう行くわ」

そつ言いながら真は鞆の横にかけていた鞆を手にする。

「へーへー。まあ俺もこの後女子チア部を見学に行かないといけな
いからちよつとつい」

「……まあ、捕まらない程度にしようよ」
いやらしい顔でにやつく浩輔に最低限の忠告をして見捨てて、真は教室を後にする。

あの顔の浩輔に何を言っても無駄なのは経験上知っており、不本意だが浩輔の一番の親友と周囲に認識されているため、後で自分にまで追求の手が伸びてこないように「俺は注意しました」と言えるように予防線をはる。

余談だがこの後、チアリーディング部から通報され生徒指導の教師に連行されながら、「俺は悪くない」と連呼する一人の学生がいたことは言つまでもないだろう。

「いやー、いい天気だ」
来る未来に思いをはせながら降り注ぐ日差しに目を細める真だった。

森の中を歩きながら真は数日前に出会った一人の少女を思い出していた。

絡繰茶々丸と名乗り全身に猫を乗せた少女。

自らを機械と言い、しかし猫の扱いに困る少女。

真が広場を目指す理由の一つに彼女の存在があった。

と言つてもそれは色恋といった艶っぽい理由ではなく、茶々丸との別れ際に真の行動が原因であった。

「もしこれで猫に怪我でもさせてたら笑えんしなあ」

別れ際に猫をつかむ力加減と言つて彼女の手を包んだことは咄嗟の思い付きであり、その後、「どこの少女漫画だ」と悶絶したのだがしばらくするともし茶々丸が猫をつかむことに挑戦し、怪我をさせていたらという不安が真を襲った。

普通ならそこまで考えないのかもしれないが、昔の事件のせいで物の最悪な事態を想定する癖がついている真は、茶々丸が猫を傷つけ、そのことで彼女の心に傷ができたらと考えここ数日もんもんとし

ていた。

それなら確認しに行けばよかったのだが、真も思春期なのか、気障なセリフを言って別れことで茶々丸に気持ち悪いと思われていたらなどという考えが真の足を広場に向けないでいて、板挟みになっていたのだが、ついに覚悟を決めた真が発した言葉が冒頭のそれだった。

「あー」

もう少して広場というところに真はいた。そしてそこから10分ほど動いていない。

いくら覚悟を決めたといっても実際に会うかもしれないとなるとその足は止まり、口からは悩むような声しか出てこない。

このままでは少なくとも日が暮れるくらいまでは悩んでいそうなものだったが、幸か不幸か真の立ち尽くしている場所は広場からつながらる道の近くだった。

つまり、

「清水さん？」

広場を利用する人も通るといっていることで、

「よ、よお絡繰。奇遇だな。」

一度出会ってしまったえばそこから逃げ出すほど真は臆病ではなかった。

「……」

「……」

猫の鳴き声や風が葉を揺らす音はするがそこに人の声は混ざっていない。

広場の近くで出会い、特に会話をするともなくそれぞれが広場のベンチに座りそれぞれのやることに手を付ける。

そもそも茶々丸は起動してからあまり時間がたっていないということもあり人と積極的に会話を使用とする性質ではなかったし、真は真で人と話すことは苦手ではないが以前のことやそもそも年頃の女性と気軽に会話をこなすという経験値が圧倒的に不足しており結果

としてお互い無言で作業をするといった状態が続いていた。

茶々丸は持ってきたキャットフードを開封し、真は鞆からスケッチブックを取り出す。

偶然にも数日前と同じ状況であったが、それぞれに数日前とは違っている状況があった。

茶々丸には猫は乗っておらず、真は描くことが始められないでいた。

猫がほぼ茶々丸の方に言ってしまったといるといったこともあったのだが、ちらほらと真の近くにいる猫も真が近づこうとしたり、手を伸ばしたりするとすると逃げて行ってしまふのだった。

遠くから描くのも構わないのかもしれないが、浩輔が言っていた「逃げない」という言葉もあり、若干意地になったように猫に近づこうとするが成果はなく力なくベンチに腰を下ろす。

「話が違つぜ、浩輔」

口からは友への愚痴がこぼれる。

以前も同じようなことがあったことを思い出しもしかしたら自分が猫に嫌われているだけなのかもしれないという考えを思考の片隅に追いやる。

自分が何かに嫌われているという考えはだいぶ落ち込むものだ。

それは相手が人間だろうと動物だろうと変わりはない。

絵に集中していれば何とかなるかと考え、茶々丸の後に続いて広場にやってきたが、こうなってしまうと真は手持無沙汰になってしまう。

この場を去るといふ選択肢もあるのだが、この広場に来てまだ数分しか経っていないのに立ち去るといふのは茶々丸を避けているようで真がその選択肢を取ることはなかった。

結果、やることがなくなつた真の目は自然と猫が作り出す円の中心部にいる茶々丸に吸い寄せられる。

正確にはその手にだが、その手はキャットフードに殺到する猫に隠され真からは見えなかった。

しばらくそのまま時間は過ぎ去っていく。

「あの後も猫に餌やりに来てるのか？」
穏やかに過ぎていく時間が真の緊張感を奪い去ったのかもしれない。

そう思えるほど言葉は自然に真の口から零れ落ちた。

言った本人も茶々丸が言葉に反応して真の方向を向いてから自分が話しかけたことに気づくくらいにそれは自然だった。

「はい、帰り道からは少し離れていますですがマスターが放課後は自由にしていると許可をいただきましたので」

「へえ、前も思ったがすごいな、猫」

そう言って笑っている真を見て茶々丸は少し首をかしげる。

「清水さんは絵を描かれないのですか？」

「ああ、いや、まあな」

真は軽く足元を見渡し次に茶々丸の足元を見て、降参という風に両手を上げる。

「猫を描こうかな、と思ってきたんだけどどうにも、な」

その真の言葉に少し考えるようにした後、茶々丸は足元の猫から白子猫を抱き上げ、真の方へ歩いてくる。

茶々丸の一步一步に猫たちは道を開け、その後ろに続いていく。

そして茶々丸は真の前まで来ると軽く頭を下げる。

「先日ありがとうございました、清水さん」

そう言いながら茶々丸は抱いた猫を真に差し出してくる。

驚いたといったように口をぽかんとあけながら真は差し出された子猫を無意識に受け取る。

アドバイスは役に立ったか、その後どうなったかといった心配をしないで、それをどう切り出すかを悩んでいた真だったが、いざ来てみれば茶々丸本人は猫に群がられて困っていた先日とは別人のように真の心配を簡単に打ち消してしまった。

「う、こいつは近くで描いても大丈夫かな？」

考えていた言葉が消し飛び、そして真の口から出てきたのは何ともらしい言葉だった。

「はい」

「そっか、ありがとな。」

「いえ、「こちらこそありがと」ございました」

いやこっちこそ、いえこちらこそといったお礼の言い合いにあきれたように真の腕に抱かれた子猫はあくびをして、まだ？というように一つ「なー」とないた。

その鳴き声に真は苦笑を漏らす。

「主役がお待ちかねだ」

そう言っつて子猫をおろし準備を始める。

茶々丸はその様子を見てゆっくりと先ほどまで座っていたベンチまで戻り腰を下ろした。

それを視界の片隅で捉え、真はゆっくりと静かに線を重ね始める。

「この空気を壊さないように、慎重に。」

「この空気を絵にあらわせるように やさしく。」

第五話 痛み

それはある日のことだった。

「茶々丸。ちょっと研究室まで顔を出してもらっていい力？」

一日の授業も終わり、帰り支度をしていた茶々丸に超から声がかけるられる。

「……………」

超の傍らにはエヴァンジェリンがたっており、茶々丸がそちらを向くと何も言わず、行って来いとでも言うかのように笑みを浮かべ教室から出ていく。

「ちゅ、早くするネ」

超に目を向けると何かをたくらんでいるかのような表情を浮かべ、自分の荷物を片手に茶々丸を手招いている。

メンテナンスはまだ先のはず首をとかしげながら茶々丸は荷物を持ち、超の後に続いて教室を後にした。

「超、メンテナンスはまだ先だったはずですが、何か問題でも？」

「いや、なに。そういうんじゃないヨ」

そう言っって手を軽く振りながら超は研究室の中に入っていく。

超に続けて研究室の中に入った茶々丸の目には超が一つの小さな箱を持っている姿が映る。

蓋はついておらず、その箱の中では小さな何かかもぞもぞと動いていて、ときおり「なー」という声が聞こえてくる。

「どぶつかね、茶々丸。私にかかれば子猫一匹程度、ちよちよいのちよいネ」

箱の中で動いていたのは以前茶々丸がけがをさせてしまった子猫だった。

超の言う通り、あの時のぐったりとした様子とは違い、しきりに箱の中から出ようと箱の壁をひっかいている。

「茶々丸？」

超はしばらくどや顔で茶々丸の反応をうかがっていたが、いつまでたっても帰ってこない茶々丸の反応を訝しむようにその名を呼ぶ。

しかし茶々丸からは何も返ってこない。

言葉も、動きさえもなく茶々丸はただ子猫を見つめていた。

そんな茶々丸に超はさらに声をかける。

しかしその表情は先ほどまでの訝しむような表情ではなく、何かに気づいたかのようににやりという笑みを顔に貼り付けていた。

「どっしたね、茶々丸。うれしくないかね？」

「……わかりません」

固まったまま、ただその一言を茶々丸は絞り出す。

茶々丸が固まってしまった理由は単純なものだった。

わからない

自分の中に広がる暖かさ(安堵)が、その中に混ざる小さな痛み(罪悪感)が、それが何なのか単純にわからないからこそ動けなかった。

もちろん超とエヴァンジェリンはこうなるかもしれないと、正確にはなあって欲しいと思っていた。

いろいろな感情を感じ、悩むことが心の成長につながると二人は考えている。

超は最初、猫が完治した段階で茶々丸に会わずに森に戻そうと考えていた。

助かったとはいえ自分だけがを負わせてしまった猫と茶々丸を会わせることがその芽生えかけた心にとのような影響を与えるかは超をしてもわからなかったからこそそう考えたのだが、そこにエヴァンジェリンがストップをかけた。

「子猫の一匹」ときから逃げているようでは私の従者は務まらない」

超の研究室に乗り込んできてそう言い放ったエヴァンジェリンのその言葉には茶々丸に対する信頼とこれくらい乗り越えて見せろという思いがこもっているように超には感じられた。

超も茶々丸の親だという自負がある。だからこそ自分の前で自分以上に茶々丸を信じているエヴァンジェリンに対抗心がわいたというわけではないが超も茶々丸を信じることに決めた。

結果として今、茶々丸は超たちの目論見通り未体験の感情によって悩んでいる。

あとはこれ乗り越えられるかということだった。

なおこの時の二人の会話を聞いていたクラスメートは子供の教育方針でもめる夫婦のようだと失言を漏らし、二人によって制裁されているというのは別の話である。

「もう怪我ひとつないからネ、この子はお前に返すヨ。飼うなり、元の所に戻すなり 好きにするといいネ」

まあ飼うのはエヴァンジェリンが許さないだろうけどネと言って超は茶々丸にむかって箱を差し出す。

箱の中では猫が茶々丸に気づいたのか、先ほどより大きな声で鳴き始める。

その声につられるように茶々丸は恐る恐るというふうにゆっくりと手を伸ばして子猫を撫でようとする。

あと少し、超が心の中で呟くとき、わずかに、ほんのわずかに猫の体が怖がるようにこわばった。

それはもしかしたら猫自身も自分の体がこわばったとは気づいていなかったのかもしれない。

「……………」

普通の人なら気づかないような、それほどわずかなことだったが、茶々丸はそうではなかった。

その目のカメラは残酷なまでに正確に猫の体がこわばったのをとらえ、そしてその瞬間、茶々丸の視界にはあの時のけがをした猫が映し出され、次の瞬間にはエラーという文字で埋め尽くされる。

切り裂かれてしまうのではないかと思うほどの痛みを感じ、反射的に猫に触れようとしていた手を下げ、その手のひらをきつく握る。

「茶々丸？……………茶々丸！」

自分に呼びかけてくる超の声も遠く、茶々丸は一步、二歩と後ずさりをしたあと踵を返すように研究室を後にする。

茶々丸の中では自分を、生まれたての心を守るように、自己防衛システムが作動し、そのシステムが茶々丸と今回のエラーの原因との距離を開けようとしたゆえの行動だった。

ふらつくように、一歩一歩と茶々丸は逃げるように研究室を離れていく。

「茶々丸！」

すぐに茶々丸を追おうとした超だったがそれを引き留めるように研究室の窓が開き闖入者が入ってくる。

「あいつは大丈夫だ。超、お前は今何があつたか調べる」

「……いつから居たネ、エヴァンジェリン？」

「……いいから早くしろ。茶々丸は大丈夫だ」

超の突き刺すような視線から逃れるように腕を横に一振りし、闖入者、エヴァンジェリンは超をせかす。

自分に言い聞かせるように茶々丸は大丈夫だと2度繰り返したエヴァンジェリンとしばらくにらみ合い、このままだと埒が明かないかと超はあきれたように一息を吐く。

「わかったよ、お父さん」

「誰が、お父さんだ！」

食って掛かるエヴァンジェリンをなだめるようにしながら片手で研究室内部のカメラの確認を始めた超が、その手に持っていた箱の中が空っぽになっていることに気づくのに遅れ、気付いた時にエヴァンジェリンと二人であたふたするのはもう少し後の話。

「……」

「じゃー」

あれからしばらくして落ち着いた茶々丸の耳にその声が聞こえてきたのは研究室からあまり離れた場所ではなかった。

茶々丸がそれほど速く歩いていないこともあつてか猫は茶々丸に

ついでにきていた。

茶々丸がそれに気づいてからしばらくたったが茶々丸は時折困ったように猫を覗うが、猫は変わらず茶々丸の後をついてきていた。追い払うことはできず、また距離を離そうと歩くスピードを上げても、そのたびに聞こえる悲しそうな猫の鳴き声に理由はわからないが茶々丸の足は止まってしまふ。

結果としてまるでハーメルンのように猫を引きつれ茶々丸は街の中を歩き回っていた。

「絡繰っ。」

商店街に差し掛かろうとするところでそんな茶々丸の名前を呼ぶ声がし、茶々丸は足を止め、同じように猫もまた足を止め一人と一匹は声のした方を向く。

「よ、猫なんか引き連れてどっしたんだ？」

そこには見たまんま買い物帰りの真が片手をあげ立っていた。

第六話 路地裏の喫茶店

真はその日、商店街での買い物中に不審な動きをする茶々丸を見つけた。

なぜかは知らないが、買い物をするわけでもなく商店街を歩き、不審なまでに自身の後方を気にしながら茶々丸は歩いていった。

どうしたのかとその後方を見てみると一匹の子猫が茶々丸の後についてきており、明らかに茶々丸はその猫の存在に困っていることがわかると真ははたと首をかしげる。

猫を振り切りたいのかそうでないのかわからない茶々丸の奇妙な動きを見ながらしばらく考えたのち、すぐに納得する。

すなわち、餌をやっていたらあの子猫に懐かれてしまい、結果あの子猫がついてきてしまったのだと。

「なんていうか、あいつらしいな」

そう言って、苦笑すると真は歩く速さを少し上げ、前を歩く茶々丸に声をかける。

「絡繰？猫なんか引き連れてどうしたんだ？」

呼びかけた声に気づいた茶々丸が真の方向へと振り返り、軽く頭を下げて挨拶するのを手を振ることでやめさせ、その茶々丸の後方にいる猫を指さし、尋ねる。

「猫、どうしたんだ？ついてきちゃったのか？」

「いえ……あの……」

「ん？」

普段の茶々丸からは想像できないくらいに言葉に詰まる茶々丸を見て真はあれ？という風に内心で首をかしげる。

真もそんなにたくさん茶々丸とあっているわけではないが、それでも彼女は普段、このように曖昧な言葉は使わないことぐらいは短い付き合いの中でわかっていた。

二人の間に無言の時間が流れる。

茶々丸は何かの言葉を探し、真はその茶々丸を待つようにしながら

時間が過ぎていく。

しかし待てども待てども二人の間に言葉という音は生まれず、商店街の真ん中で向かい合って言葉もなく立ち尽くす二人の周りにはひそひそと話をする見物人の輪ができ始める。

「別れ話のもつれですって」

「あら、やだわ、あんなにかわいい子を泣かせて」

「最低ね」

周りから突き刺さる視線と言葉に茶々丸はともかく真は軽くあたりを見回しうんざりしたように溜息をつく。

このまま茶々丸の言葉を待ってもいいが、そうなるともうしばらくはこの輪の中にいなければならなくなってしまい、今も真の耳に聞こえているひそひそ話の内容がこのままだとより悪化していきそうな予感を感じる。

今でさえ居心地が悪いのに、これ以上になってしまったら、そう考えたときには真はもう次の行動に移っていた。

「あー、絡繰」

右手で困ったように頭をかきながら茶々丸に呼びかけると、左手で自分の背後に位置する路地裏を指しこの囲みから抜けることを提案する。

「とりあえず、「こ」を離れないか。ちょっと話をするにも騒がしいしな」

「……はい」

そう言くと茶々丸はすでに歩き出した真の後を追って路地裏に入っていく。

真達が動き出すと、周りを囲んでいた輪も自然と溶け、後には真に對する鋭い視線のみが残るのみであった。

真もその視線から逃げるようにそそくさと路地裏に逃亡しそのあとを茶々丸、そしてその茶々丸の後にてってという足音を鳴らして猫が小走りですべていく。

後に残ったのは少しのざわつきと再び流れ始める日常という名の空気だった。

「ほら、メニュー。好きなのを頼みなよ」

「あの、清水さんこれは……？」

「ああ、ここは前友達に教えてもらった場所だね。この時間なら人も少ないからな」

そう言っつて真はあたりを見回す。

二人と一匹は路地裏の喫茶店に来ていた。

以前浩輔に教えてもらった場所だったが、真の言葉通りこの時間、人はあまりおらずほぼ二人の貸切状態のようになっていた。

「決まったか？」

「いえ、あの……」

真は困惑している様子の茶々丸を見て、少々強引過ぎたかと思いつつも、あの場から逃げるためとはいえ、茶々丸を誘ったからには乗りかかった船だと思い、できる限り茶々丸の助けとなるつもりだった。

「んーじゃあ俺はおすすめで、絡繰もおすすめでいいか？何か飲めないものとかある？」

「いえ、そう言っつたものはありませんが」

そう言っつてなおも言葉を紡ごうとする茶々丸を遮るように、真はいつの間にか近くに来ていた定員に「じゃあそれで」と告げ注文を済ませてしまふ。

その際に足元で開いている椅子に上ろうと奮戦している子猫に目を向け

「こいつにも何か適当なものをお願いできますか？」

と多少マナー違反な注文をしたのだが、それに慌てることなく定員はうつつすらと笑みを浮かべ

「かしこまりました」

と一礼してメニューを回収し去っていく。

しばらくすると店員は真と茶々丸にはコーヒーを、そして何とか椅

子の上に乗れた子猫の前に猫用のものですと前置きして皿に注がれたミルクを置いて去っていく。

「猫用のミルクなんてものがあるんだな」

「はい。人用のものはあまり猫にとってはよくありません」

茶々丸の言葉に一つ感心をしてから真は運ばれてきたコーヒーに口をつける。

コーヒーから薫る香りと路地裏のオープンテラスに流れる空気に時間の流れをゆっくりになったように感じながらちらつと対面に座る茶々丸を見ると彼女はコーヒーには口をつけず真の方を向いていた。

「どうした？飲まないのか？冷めるぞ？」

真がそう言つと茶々丸もコーヒーに口をつける。

そのまましばらく路地裏にはコーヒーカップと受け皿がぶつかるかすかな音と猫の鳴き声、風の音以外は聞こえなくなる。

表通りの喧騒も遠いオープンテラスで二人は先ほどの焼き直しのように向かい合い無言で、先ほどとは違い手に持ったコーヒーカップを傾けていく。

「俺の場合なんだけど」

もつカップの巾着がなくなるのかというところで、真はそう前置きをして話し始める。

「頭ん中がごちゃごちゃしちまった時はさ、コーヒーを飲んでぼーっとしていると妙に すっきりするんだよ。こつこつ静かな場所だととくにね」

こつこつは最近知つただけだな、とそう言つて真はカップを置く。

「だからさ、何があつたかは知らないし、まあお節介かもしれないけど、絡繰も落ち 着いたら何があつたのか相談してみないか？」

そこでいつたん言葉を切り、照れくさそうに笑いながら話し続ける。

「ま、なんだって解決とはいかないが頼れる先輩としては、かわいい後輩の力になつてやりたいんだよ」

「……」

恥ずかしさを我慢して言った真に対する茶々丸の返事は沈黙だった。

(さすがに、気障すぎた)

そんな風に悶絶する内心を表情に出さないように笑顔をキープすることに必死になっていた真だったがしばらくすると茶々丸はその重たい口を開いた。

「わかりません」

「わからない？」

真のおつむ返しの質問に茶々丸は軽く頷き、自分の胸に手を当ててゆっくりと話し出す。

「私がなぜ、言葉に詰まるのか。なぜ胸が痛いのか。なぜ体が動かなくなるのか。」

そして椅子の上から茶々丸を見つめる子猫を一瞥する。

「なぜ」の子が私についてくるのか。私にはわかりません」

茶々丸はそう言ってなぜかあふれる胸の痛みに耐えるように目を閉じる。

生まれたての何も知らない少女を襲う感情という濁流から逃げるように、隠れるように彼女はその体を自分で抱くように縮こまらせる。

なー、と子猫は茶々丸を心配するかのように鳴くがその声にすら茶々丸はおびえるように体を震わせる。

そんな茶々丸の様子に真も話す言葉を探して二人の間には重い静寂が落ちる。

しかしその重い空気を吹き散らすかのように一つ息を吐いて真は話し出す。

「とりあえず、今日会ったことを話してみないか。絡繰だけじゃわからないことも、俺と、こいつと絡繰の3人で考えればわかるかもしれないだろう」

そう言って真は傍らの猫をに目を向ける。

子猫も真の言葉がわかっているかのように胸を張って一つ、なーと鳴く。

そんな猫の様子に笑みを浮かべ、茶々丸の方を覗くと彼女は驚いたような顔をしながらもその口元には無自覚ではあるうが若干の笑みが浮かんでいるようだった。

「まあ観念して話してみろよ」

それでもためらう茶々丸を押し切るように促すと、茶々丸もポツリポツリと話し始める。

「この子猫がいつか話したけがをさせてしまった猫であること。」

今日子猫を触ろうとしたらこの子がおびえたこと。

その時に原因不明の痛みとエラーが発生したこと。

自然と体が猫から離れたこと。

猫がずっとついてきていること。

猫から離れようとする体が勝手に動かなくなること。

茶々丸は一通りのことを話し終えると何かを考えている様子の真に目を向ける。

しばらく真は何かを考えている様子だったが、突然自分の荷物の中からスケッチブックと鉛筆を取り出し、突然のことについていけない茶々丸を置きざりに猫をスケッチし始める。

「なんとなくはわかったよ」

どつすべきかとおろおろしている茶々丸の方には目を向けずに真はそう言った。

「絡繰はさ、その子も含めて猫が好きなんだよ」

「そっ、でしょっか」

ああ、と真は頷き、手を止めることなく話続ける。

「好きだから、怖いんだ」

そう言った真の表情は過ぎ去った遠い過去を懐かしんでいるかのようになり、そして悲しんでいるかのようだった。

「怖い、ですか」

よくわからないといった表情を浮かべる茶々丸だが真はただひたすらにスケッチブックに猫をかきながら話し続ける。

「好きだから、傷つけるのが怖い。好きだから、嫌われるのが怖い」
そこまで話して真は手を止め茶々丸の方へ振り返る。

「傷つけたくないから、嫌われたくないから離れようとした」

そう語る真はまるで自分のことを言っているような悲しみを含んだ笑みを浮かべながら話し続ける。

「それでも、好きだから近くにいたいって気持ちもあって、それで離れたって気持ち ちの板挟みになっちゃったんだろ」

そこまで真が話し終えたとき、茶々丸は自分の中で渦巻いていた鉛のような重さが少し軽くなったように感じた。

それは真が言ったことが的外れではなく、逆に茶々丸の内面を的確に表しているからだったのだろう。

ただそれで茶々丸の悩みすべてが解決したわけではなく自然と茶々丸の目は椅子の上でくつろいでいる猫に向かう。

それは真もまた承知していることであった。

まだ残されている茶々丸の悩みのもと、それは子猫に嫌われているかどうかという点だった。

自分の感情がわかっててもこの子猫に嫌われていたら、そう考えると茶々丸の胸を鋭い痛みが襲う。

子猫から目を背け痛みを耐えるようにする茶々丸を見て真は自分の描いた絵をもう一度見て覚悟を決めるように軽く目を閉じ、そしてその後、目を開けるとその顔に道化師のような笑みを浮かべる。

「絡繰、笑わないで聞いてほしいんだけどね」

そう前置きをして、真は騙る。

「俺はさ、魔法使いなんだ」

第七話 わずかな勇気が本当の魔法

ポカンとする茶々丸の顔を見ながら真は恥をそこらのごみ箱に捨て去り言葉をつづける。

「俺は魔法使いだから動物の気持ちとかも一目瞭然なんだぜ」

「そんなのですか？」

道化師のように言葉を紡ぐ真とは対照的に茶々丸は冷静に普段通りに馬鹿にした様子もなく真に訪ねてくる。

そんな茶々丸の様子に自分のやっていることが馬鹿らしくなり道化師のような口調をやめて普段通りに話し始める。

「まあ話半分で聞いてくれていいんだけど、なんか絵をかいてるとそのモデルの気持 ちとかなんやらが見えたりする時があるんだよ」
そう話す真の話を茶々丸は変わらずに聞き続ける。

それは彼女自身の性格というよりはむしろ魔法使いが実在することを彼女が知っているからだった。

もちろん真自身は魔法使いが実在するなどということは知る由もなく、空気を和ませるためにそんな冗談を言ったつもりだった。

「だから今こいつをスケッチしたときにさこいつの内面というか思っていることみた いなのはわかったんだ」

そこまで一息に言い放って真は頭を抱える。

(そんなわけがあるか)

自分で言っておいてあまりの荒唐無稽さに自分であきれていたのだった。

もちろん真が言っていることは事実なのだが、それを言葉にしたときのその胡散臭さに自らあきれてしまつ。

(これはもつだめかもわからん)

そう思いながら死んだ魚のような目で茶々丸を覗くと、真にとつては以外にもあきれた様子を見せず真の言葉を待っているようだった。その様子を不思議に思いながらもこれ幸いと真は言葉をつづける。

「まず第一にこいつは、怒ってて、怖がってる」

その真の言葉を聞いた瞬間、茶々丸無表情の茶々丸の瞳から一筋、涙が零れ落ちる。

それはやはりというあきらめの気持ちと悲しみの気持ちから生み出された静かな、悲しみのそして彼女が生まれてから始めて流す涙だった。

「ただそれは…」

悲しみのそこに沈もうとする茶々丸の意識を、先ほどより強い真の声を引き上げる。

はっとしたように茶々丸が真を見ると、彼の表情には優しげな笑みが浮かんでいた。

「それはさ、絡繰の手におびえてしまい、お前を傷つけてしまった自分に対しての怒り、お前に嫌われてしまっくんじゃなかったって、恐怖だよ」

「えっ……」

茶々丸はその瞬間、真が何を言っているかわからないというような表情を浮かべる。

もちろん言葉は一言一句聞き漏らしてはいないが、その言葉の意味を考えるのに、そして理解するのに少し時間がかかってしまった。

その間にも真は言葉をつづける。

「トリアウマっていつかさ、やっぱりけがを負ったことは覚えていて、その際にこいつはお前の手がちよとばかし怖くなっちゃったんだよ」「そう言っって真は椅子の上にいた猫を抱え上げながら茶々丸に近づく。」

「普通だったらお前が近づくだけでも逃げちゃうもんだろうけど、こいつはお前が大好きだからさ、撫でてほしくて頑張ったんだ」「それでも体の方がちよとびっくりしたみたいだけどな、とつづけながら真は腕の中の子猫の頭を撫で茶々丸に笑いかける。

「だからさ、心配すんなよ。こいつはお前のことが大好きだとさ」

「あっ……」

そう言って真は子猫を茶々丸の膝の上に下してやる。

茶々丸の体が一瞬こわばるが子猫が茶々丸の顔を見上げ一つ鳴くと茶々丸の体に入っていた力がゆるゆると抜けていく。

「今度はお前ががんばる番だぞ」

その真の言葉につられるように恐る恐る茶々丸が子猫に向けて手を伸ばす。

そしてあと少しで触るといったところでまたもや子猫の体に震えが走り、それを見て茶々丸の手も止まってしまう。

また先ほどと同じようになってしまっのかと目を閉じ、おびえそうになった茶々丸の肩に優しく手が置かれ、後ろからそつと背中を押すように真の声がする。

「大丈夫、がんばれ」

その声にはっと目を開けた茶々丸の視界に映ったのは信じるようにこちらを見上げる子猫の姿だった。

わずかに体を震わせながらそれでも茶々丸の膝から動かずに彼女を見上げるその姿に、止まっていた茶々丸の手が少しずつ動き出した。

最初は壊れ物を触るように恐る恐る。

次第にゆっくりと愛おしむようにその手つきからは恐れが消えていく。

しばらくしてお代わりを注ぎにきた定員の目には先ほどまでの悲しみに暮れる少女の姿はなく、ある種の絵画のようなじゃれつく猫を優しく撫でている微笑みを浮かべた少女の姿があった。

その少女の目には先ほどとは違う意味のしずくがあふれていた。

最終話 しずく

「どつだ、超っ？」

「あいやー、全然わからないネ」

そんな会話を交わす少女たちの前では数台のモニターが明かりを照らし、先ほどの研究室内の映像が様々な角度から繰り返し流れている。

先ほど茶々丸と猫の間に何が起こったのかを解読しようと映像を流し続けている二人であるが、その作業に進展はなく、その作業はもう一人の研究室の主が入ってきてても続けられていた。

「二人とも、さっきから何やってるんですかー？」

モニターにかじりついている二人に入ってきた人物、葉加瀬聡美が声をかけるが、二人はそれに気づいていない様子でモニターを見続けている。

そんな二人の様子に首を傾げながら葉加瀬は持っていた自分の荷物を近くの椅子の上に置き、備え付けのコーヒーマーカーから自分のカップにコーヒーを注ぐ。

カップに口をつけ、再び二人の方を向くと相も変わらずの光景がそこにはあった。

何の気なしに二人の方向に歩き出した葉加瀬を遮るように研究室の扉が開き、室内に新たな人物が入ってくる。

その人物に気づき右手を挙げて軽く挨拶をする。

「いらっしゃーい、茶々丸と、あれ、たま五郎？」

「くんごちは葉加瀬」

葉加瀬の挨拶に頭を下げた答えながら茶々丸は自らの腕に抱いている子猫を見る。

子猫は違うという風に首を振っているがそんなことお構いなしに葉加瀬は小走りで茶々丸に近づいてきて、その腕の中の子猫をのぞき

込む。

「そういえば元気になったんだよね、たま五郎。さっそく茶々丸と遊びに行ってたんだ」

「茶々丸!？」

葉加瀬の言葉にモニターにかじりついていた二人がものすごい勢いで振り返る。

そんな二人の様子に驚き目を丸くする葉加瀬をよそに二人は茶々丸の姿を認めると、仕切り直しをするようにコホンと一つ咳払いをする。

「ふん、やっと戻ったか。主人たる私を置いていくとは貴様もまだまだだな」

「とか言いながらエヴァンジェリンはさっきまでとても心配していたネ」

素直じゃないヨ、という超にエヴァンジェリンの蹴りが放たれるが超は余裕をもってこれをかわす。

「冗談ネ、冗談。あまり焦ると本当のことのように見えるヨ」

「うるさいわっ！貴様は黙っているー！」

そのままじゃれあうように目にもとまらに技の応酬を始める二人だが、それを遮るように茶々丸がエヴァンジェリンに声をかける。

「マスター」

「む、なんだ茶々丸」

茶々丸の声に詰められたその真剣さにエヴァンジェリンは手を止めて茶々丸の方へと向き直る。

しばらく無言で向き合った後に茶々丸は意を決したように口を開く。

「お願ひがあります」

「はい」

茶々丸の言葉にエヴァンジェリンは笑った。

数日後、真は商店街で魚の目利きをしていた。
生活費の大部分を画材へとつき込む真に外食をする余裕はなく、基本的には自炊をすることとなる。

最初は食べられればいいと適当に食材を買っていた真だったが、そのあまりの適当っぷりに見かねた商店街の人々が買い物に来た真を捕まえ、あれが旬だ、鮮度がとつたと教え込んだ結果、持ち前の目の良さもあり、真の目利きはかなりなものになっていた。

そんなわけで今日も安価でおいしい食事を食べるため目利きにせいを出していた真だったが、自分の名を呼ばれたような気がして顔を上げ、あたりを見回す。

「清水さん」

「うおっーって絡繰か」

思ったより近くから聞こえた声に驚きながら声のする方を振り向くとそこには買い物袋を手にした茶々丸が立っていた。

「よお、この間は無理に誘って悪かったな」

「いえ、こちらこそごちそうになってしまいありがとうございます
た」

「いって、俺が誘ったんだしな」

そう言って笑つ真に、茶々丸はもう一度ありがとございましてと頭を下げた。

「そっちは買い物か？」

「このままではあの日のように埒が明かないと考えた真は多少強引に話をそらす。

茶々丸はその言葉に頭を上げると、そうですと返して一つ報告がと言葉をつなげる。

「報告」

「はい、先日の猫なのですがマスターの許可を得て家で飼うことになりました」

「お、そいつはよかったな」

しずくと名付けました、と言つ茶々丸に真は笑顔で返し、手に持つ

ていた買い物袋の中から先ほど目利きしたばかりの鰯を取り、茶々丸の買い物袋の中に入れる。

最初は遠慮していた茶々丸だが真がスケッチさせてもらったモデル料だよという淡い笑みを浮かべながらそれを受け取る。

再びありがとございますと頭を下げる茶々丸に苦笑いしながら、ふと強い悪寒を感じ茶々丸の遠く後方にこちらを見ている金髪の小柄な少女の姿に気づく。

「そんなにいちいち頭を下げなくても大丈夫だよ。それよりいいのか、向こうで友達 が待つてるみたいだぞ？」

その言葉に茶々丸は頭を上げる。

本来ならもう少し話をしていたいところではあったが先ほど感じた悪寒がその思考を中断させる。

「また今度な」

そう言っって手を振る真に茶々丸も挨拶を返す。

「はい。またお会いしましょう」

茶々丸はそういって踵を返し彼女を待つ少女の方へと小走りでかけていく。

その後ろ姿を見送り真は再び今日の夕飯のための目利き作業に戻っていく。

先ほど感じた悪寒について風邪かな、などとのんきなことを考えながら。

茶々丸がエヴァンジェリンのもとへ戻るとそこには不機嫌そうな顔をしたエヴァンジェリンとその傍らににやにやといやらしい表情でボイスレコーダーを茶々丸に向ける彼女のクラスメートである朝倉和美が立っていた。

「突然すいませんでした、マスター」

「ふん、かまわんさ」

先ほど、買い物を終えて帰宅しようとしていた茶々丸とエヴァン

ジェリンであったが、茶々丸が真の姿を見つけ彼女はエヴァンジェリンに許可をもらい真のもとへ向かった。

買い残でもあったかと茶々丸に許可を出したエヴァンジェリンであったが、茶々丸が見知らぬ男子生徒と親しげに会話をしている姿を見て彼女の中の父性本能が刺激されつい強くその男子生徒をにらんでしまった。

エヴァンジェリンにとっての苛立ちの種はそれだけではとどまらなかった。

茶々丸が話しているところを運悪くクラスメートの朝倉に見つかってしまい、さらに朝倉の質問の矛先は茶々丸と一番近い位置におり、今手持ち無沙汰なエヴァンジェリンに向いてしまったことで彼女の苛立ちはピークに達しようとしていた。

そんなエヴァンジェリンを知ってか知らずか朝倉の質問の矛先は小走りで駆け寄ってきた茶々丸にうつる。

「絡繰さん、今の人ってだれ!? 結構仲よさそうに話してたけど、もしかして彼

氏!?

」そんな朝倉の矢継ぎ早の質問に茶々丸は首を振ってこたえる。

「いえ、清水さんは彼氏というものではありません」

その茶々丸の言葉にエヴァンジェリンから発せられていたプレッシャーが緩む。

朝倉はえー、と残念そうに声をあげるがすぐさま気を取り直したように質問を続ける。

「でも結構仲よさそうだったしー、ほらたとえばデートとかしたことはないの? お茶したり、買い物したりとか。」

「喫茶店でコーヒーをごちそうになったことはありません」

その茶々丸の言葉に二人の動きが一瞬固まる。

その後朝倉の目には狂気のような光が宿る。

「え……マジで? 二人で?」

「はい」

不気味なほどの静けさの中、茶々丸は朝倉の質問に淡々と答えてい

く。

「どっのお店？」

「路地裏の影時計というお店でした」

店名を聞いた途端朝倉の顔が赤くなる。

浩輔が真にこの店を紹介した時にも浩輔は言っていたが、影時計は恋人同士のデートスポットとして有名な店だった。

「うわー、これはもう確定かな、ありがとう茶々丸さん」

朝倉はそう言いながらいつの間にかボイスレコーダーから持ち替えていたメモ帳にすごい勢いで文字を書き込んでいく。

何の事だかわからないと首をかしげる茶々丸の前に今まで不気味な静けさを保っていたエヴァンジェリンがフラッと近寄る。

そんなエヴァンジェリンに気づかない朝倉はメモ帳から顔を上げずにとどめともいえる質問を口にする。

「絡繰さんはさっきの、清水さんだっけから何かされてないの？ キスとかさ」

その言葉に茶々丸は胸の前で自身の手をもつ片方の手で優しく包み、まだぎこちないながらも淡い笑みを浮かべる。

「手を、優しく握っていただきました」

その直後、商店街に女子生徒の嬌声と説明しろという怒声が響き渡った。

このニュースは翌日には朝倉の手によりクラス中に広まり、茶々丸の生みの親も知るところになった。

その日の放課後、父（エヴァンジェリン）と母（超）と娘（茶々丸）とその他一名（葉加瀬）による緊急家族会議が開かれ、誤解が解けるまで真は身に覚えのない悪寒に苦しめられることになる。

第一話 世界樹

季節はいくつか流れ真は高等部2年へと進学した。

と言っても特に変わったこともなく、あちこちに赴いては絵を描く生活を続けていて、なかでも森の中のねこだまりの広場には今でもよく訪れている

広場では猫に餌をやっている茶々丸と遭遇し、そのたびにいろいろな猫のスケッチが真のスケッチブックの中に増えていっており、なかでもしずくと名付けられた猫がその過半数を占めている。

その茶々丸だが、最近は急速に表情が豊かになっており、無自覚に笑みを浮かべることが多くなっていった。

本人に自覚がないため、真が指摘しても首をかしげることが多数だが、以前はぎこちなかった笑顔も自然に表情に出るようになってきていた。

頻繁に男女が二人つきりであっているとするとその手の噂の的になってしまいそうなものだが、それも最初のころだけでその後二人の間にそのようなうわさが流れたことはまったくなかった。

それは少女の心の成長に余計な雑音を与えて、悪影響が与えられることを嫌った少女が暗躍したという説や、「そもそもそんな男との関係など認めん」と文字にされることも嫌がった少女の雄たけびがあったなどとされているが真偽は定かではない。

実際のところ、お互いに笑みを浮かべながら森の中の広場で男女が向き合っている、と文字にするとそれこそ恋愛小説の1ページのようにだが二人の間にそのような言葉のやり取りはない。

互いに多少の雑談はするものの、一人は絵に集中し、もう一人はもとも言葉数が少ないということと絵の邪魔をしないようにさらにしゃべらないためそもそも会話自体があまりないのだった。

そんな様子が毎回続くのであきらめの悪い新聞部の少女も匙を投

げ捨てており、二人の間もまた先輩、後輩という間から変わらなかった。

「真、今日はどこ行くんだー？」

遠くから聞こえてくる浩輔の声に真の意識は引き上げられる。

枕にしていた腕から顔を上げると笑いながらこちらをのぞき込んでくる浩輔の顔があった。

「ん……もう、放課後か？」

「そ。寝すぎだよ、お前は。」

「ああ、ちょっと昨日は遅くまでやってたからなっ……」

そう言いながら真は机脇にかけてある鞆を手に取り立ち上がるうとするが軽い眩暈を感じ机に手をつけて体を支えるような形になってしまう。

「大丈夫かよ、あんまり無理をしない方がいいんじゃないか？」

「大丈夫、大丈夫。今日は世界樹の方に行きたいから一緒にいかえないけどな」

真はそういつと心配そうな表情を浮かべる浩輔に手を振り教室を後にする。

真がこうなるのはよくあることなのでいつものようにしようがないという表情を浮かべ教室から出ていく真を見送る。

よくある放課後の風景だった。

「わっしょ」

世界樹の見える広場のベンチに腰をおろし、真はスケッチブックを広げる。

世界樹はもちろん麻帆良のいたるところから見えるが、真はかなりの割合で世界樹というものを絵の題材に選んでおり、またそうでない

場合でも真のスケッチに世界樹が描かれていることは少なくない。

それは真の中では世界樹をこの麻帆良という街の象徴としてとらえているからだった。

外の世界からはじかれた真を受け入れた街、麻帆良。

その街の象徴である世界樹を描くことは真にとつて、自分は麻帆良におり、ここでは自分は排斥されたりしない、という無意識な自己暗示の一種だった。

だから真は疲れた時や落ち込んだ時には決まって世界樹の近くをスケッチ場所として選んでいて、今日もその例にもれず真が腰を落ち着けたのは世界樹の近くの広場だった。

「でっかいよなあ」

筆を走らせていると自然とそんな言葉が真の口からこぼれる。

「外の世界だったら大騒ぎだよ」

疲れているから注意力も散漫に、ここじゃあそんなことはないけど、と一人ごとをこぼしながら真は手を止めることなく描き続ける。

その言葉を聞いているものが、いたにも関わらず。

だからこそ、ここにきてよかった

そう続くはずだった真の言葉は乱入者が落とした鞆の音で中断させられてしまった。

しまったという顔で恐る恐る振り返った真の視界には信じられないといった表情で真を見つめる少女とその少女が落としたであろう鞆が映る。

(絡繰の着てる制服と同じ?)

そんな外れたことを考える真をよそにその少女は驚くほどの勢いで真に近づいてきて、目の前まで来ると鬼気せまる勢いで真に言葉をぶつける。

「あんだ、今世界樹が外の世界だったら大騒ぎって言ったよなあ！」

「……」

その言葉に黙り込む真にいらだったかのように少女は少し声を荒げる。

「答えてくれ！」

その少女の言葉には助けを求める幼子の鳴き声のような悲痛な色が見えた。

第二話 叫び

「納得いかん！」

「ふお!? じゃが、彼は一般生徒じゃからあまり、お主が絡むとのう……」

時は少しさかのぼり、学園長室ではエヴァンジェリンと学園長が囲碁を打ちながら世間話をしていた。

しかし、盤面も佳境になったところで学園長が持ち出した話題がエヴァンジェリンをいらだたせ、そしてそれが冒頭の会話につながっていく。

その話題が今エヴァンジェリン家の間でもっとも注目されているとある生徒、まあ真なのだが、に対するエヴァンジェリンの表立った接触の制限だった。

茶々丸のこともあり、どのように接触するかを考えていた彼女にとって、学園長の提案は納得できるようなものではなかったが、それと同時に自分が関わりすぎれば茶々丸の恩人でもある人物に迷惑がかかる可能性があることも、エヴァンジェリンは理解していた。

「ふん、今度までに馬鹿どもに話をつけておけよ、じじい」

「うむ、ま、お主もあまり無理はせんようにな」

結果として二人の間には妥協点で結ばれた契約が一つ交わされることとなり、片方はつまらなそうに、もう片方はやれやれといった表情を浮かべながら契約書にサインをする。

「それではな、爺。約束を違えるなよ」

そういつとエヴァンジェリンは部屋を出ていく。

学園長はその姿を見送り、溜息を一つつくくと机の上の契約書を執務机の中にしまい、疲れたように席に座る。

「これで、よかったのかの？」

「はい、無理を言ってますいませんでした」

学園長以外は誰もいない部屋で呟かれたその言葉にこたえるものがあつた。

先ほどまで息をひそめるようにして隣の部屋にいたその人物はエヴァンジェリンが退室したと同時に部屋の中に入ってきて学園長に頭を下げる。

「彼にはなるべく裏の世界から離れて生きてほしい。そうすることが彼を両親から引き離してここに連れてきてしまった僕の責任ですから」

そう言つて部屋を出るその人物の表情は普段の彼を知っている人物が見ると驚くほど曇っていた。

彼はそのまま校舎を出たところで懐から煙草を取り出し口にくわえる。

彼の脳裏には幼き日の真との出会いが浮かび、そして後悔するように顔をしかめる。

「あの日の、正義の味方気取りの僕の傲慢さが君から家族を奪ってしまった」

彼の独白はともに吐き出した紫煙とともに茜色の空に溶けていく。

「あー、えつとだな」

そう言いながら真はあたりを見回す。

少女、長谷川千雨の大声に二人の周りには大勢の野次馬が集まり始めていた。

(ちよっと前にも同じことがあつたような)

そんなことを真が考えている間にもあたりには人だかりができて始めるが少女はそれに気づかず真をにらむような強さで見つめ続けている。

人は窮地に陥ると行動がワンパターン化するのだろうか、自らの言

葉を聞かれたことの焦りと、詰め寄る少女、周囲の人の輪に追い詰められた真はいつかの時のように千雨を伴ってその輪をぬけだそうとした。

しかし真の冷静な部分が話の特殊性から人に聞かれるとまずいとあまり人のいない場所を逃げ場を選択する。

「ちょっと来てくれ」

「あ、おい……」

黙り込んでいた真が突然千雨の手をつかみ歩き出したことに対する驚きと手を掴まれた恥ずかしさから千雨は目を白黒させながら戸惑った声を上げる。

しかし真はその声が聞こえなかったかのように勢いよく歩いていく。

千雨も何度か抗議の声を上げようとするが、真の歩く速さが早く、転ばないように歩いていくために抗議の声は中断させられてしまう。

振り切ろうと思えば振り切れたのかもしれないが、彼女の中の葛藤をわかってくれる人がいるかもしれないというその希望が千雨にその行動を起こさせず、結果として彼女は手を引かれるまま人の輪を抜けて走って行ってしまった。

「おい……いい加減離してくれ……」

「お、おう。悪い」

走り始めてどれくらい経ったろうか、千雨の声に真は必要以上に強く握っていた千雨の手を離す。

千雨は少し赤くなっただ手を撫でながら警戒するように真から距離を取ってあたりを見回す。

あたりは人もまばらに、麻帆良の外れに近づいており、千雨としてもかすかな希望より身の安全が気になり始め、改めて名も知らぬ男子生徒に手を引かれていくという状況に危機を覚えるの行動だった。

「なんなんだよ突然……」

「確かに突然なのは悪かったけど、あまり大勢の前でする話でもないだろう」

「っ…じゃああなたはやっぱり」

真の言葉に驚いたように彼の顔を見つめる千雨に溜息をつきながら真は肯定を返す。

「確かに俺は君の言う通り、この街が外の世界の常識とずれていることがわかる。だからこそあまり人前ではそういうこととは言わない方がいいぞ」

人は自分と違うものを排斥しようとするから、その言葉は真が思った以上に落ち着いた音色で真の口から零れ落ちた。

その言葉は真の過去の経験からくるもので、彼のトラウマともいえるものだったが、麻帆良に来てからのやさしい出会いが、真が思った以上に彼に落ち着いて過去を思い返すことを可能とした。

千雨は真が話している間彼女はつつむきぶつぶつと独り言をつぶやくようにしていたが、話が終わった瞬間それが合図であるかのように彼女の中にたまっていたものが爆発した。

「そうだよ…あいつらはいつもそうだった…」

そう言いながら顔を上げた千雨の目には涙があふれていた！

「あいつらはいつも私がおかしいって、何を言っても、笑って！叱って!!」

彼女の一言一言が質量を持ったかのように真を襲う。

「おかしいのはあいつらだった！やっぱりそうだ、私は間違ってたなかつたんだ！」

その言葉はだんだんと真にとって鋭い刃へ変わっていく。彼の大切なものを否定し傷つける鋭い刃に変わっていく。

「おかしいんだよ！あの樹も！人も！この街も！」

千雨の言葉に真の中には大切なものを否定された怒りがあふれ、そして彼女の否定の言葉に過去の記憶がフラッシュバックする。

怖いよ

不気味

あっちいけ

千雨の言葉に重なるように真の記憶の中から聞こえてくるその声について真の我慢も限界を迎える。

「この街の何もかも、全部おかし」「うるさいっ!!」「」

突然、真は千雨の言葉を遮るように叫ぶ。

黙っていた真の突然の叫びに千雨は驚いたように体を震わせる。

驚きとともにその顔に恐怖を浮かべる千雨を見て真は若干ではあるが正気を取り戻す。

そして若干正気に戻った真は中学生に怒鳴りつけるといふ暴挙を行ったことによる罪悪感とはまだ鳴りやまない過去の声にその足を若干ふらつかせる。

その真の肩を支える人物がいた。

「っ……。大丈夫ですか、清水さん」

「絡……絡……？」

「絡繰さん？」

ふらついた真を支えたのはいつの間にか真の横に姿を現していた茶々丸だった。

第三話 涙

「どっぴつ、ムムムッ」

「偶然お見かけしたので」

「ついてきたってことか」

真の疑問に茶々丸は頷くことで答える。

そんなのんきなやり取りをしている二人に、怯みから解放された千雨がしびれを切らしたかのように声を上げる。

「なんだよ、大きな声を出せば私がビビるとでも思ってたのか！」

そう言いながら千雨はそのまま視線を茶々丸に移す。

「それにあんただってそうだ、なんでロボが人に交じってのほほん勉強してんだ よ。おかしいだろー！」

そう言い切ると千雨は荒い息をつきながら肩を上下させている。

そんな状態でありながらも千雨の視線は厳しさを維持したまま真と茶々丸をとらえ続ける。

真はそんな千雨の様子に困ったような表情をしながら冷静になった頭で考えるように口をつぐむ。

詳しい話は分からないが千雨の様子を見ると彼女が麻帆良に何かの隔意を持っていることはわかる。

真は現状では情報不足だと考え、確認するために口を開こうとするが、その真より先に茶々丸が口を開く。

「長谷川さん」

「な、なんだよー」

茶々丸は静かに、ゆっくりと空いている手を胸に当てながら千雨をみる。

「私は確かにあなたの言う通りロボット、正式にはガノイドです。人間ではありません ん。ですが……」

そして一呼吸おいて茶々丸はその声にはつきりとした意志を携え

ながら千雨に言葉を投げかける。

「私はあなたたちと一緒にいてはいけなないのでしょうか？」

「っそれは……」

茶々丸の言葉にうろたえる千雨を見て真は思考をいったん止めて溜息をつく。

そして重くなった空気を霧散させるかのように寄りかかっていた茶々丸から体を離し、声もなく視線を合わせたまま動かない千雨に声をかける。

「長谷川さん、でいいのかな？」

茶々丸に目を向けていた千雨は真の声に反応して真の方へと目を向ける。

茶々丸の言葉により冷静さを取り戻した千雨を見ながら真は落ちて着けるように優しく言葉を選びながら話し始める。

「俺は君に何があったのかはわからない。だから偉そうなことは言えないんだけど」

向けられる千雨の視線に頭をかきながら真はいったん言葉を切つて少し考えた後、話を再開する。

「俺はさ、昔麻帆良の外でちょっといろいろあって孤立っていうか村八分みたいになつたことがあってね」

「清水さん」

心配そうな表情で真に声をかける茶々丸に軽く笑みを浮かべると言葉をつづける。

千雨は唐突な真の告白に若干慌てながらもその真剣な雰囲気から口をつぐみながらも真を見続ける。

「あの時は誰も周りに味方がいないって思ってた。友達も家族もみんな俺から離れて　いったと思ってるね」

そう言つて真は過去を想い返すように静かに目を閉じる。

「まあその後なんやかんやあって麻帆良に来ただけだよ、ここに来た時俺は結構荒れてて周りにあたってたんだよ」

恥ずかしいことにな、と言いながら真は自身の過去を何でもないとのように話す。

まるでその場の重い空気を軽くするかのよう」。

「でも、そんな俺でもこの街の人は受け入れてくれた。驚くよな」
そう言いながら真が千雨を見ると彼女は思い当たる節があるようにじっと考えている。

「だからあんまり悪く言わないでほしいんだ、俺の恩人たちをさ」
真はそう言うといまだ黙り込んだままの千雨の方を見るが千雨はしばらく黙りこみ何かを考えているようだった。

千雨は真の話聞き彼と自分が似た境遇にあったことを知る。

真は麻帆良の外で、千雨は麻帆良の中で孤立した。

しかし二人には大きく異なった点があった。

真は麻帆良という場所で理解者を得て麻帆良という街に受け入れられたが、千雨はいまだ麻帆良という地で孤立している。

その一点、それが真の言葉を納得し理解しようとする千雨の心にストップをかけている。

真の言葉は千雨にとって既に救われた立場、自分より上の立場から投げかけられた言葉であり、また真が恩人だと言い、悪く言わないでほしいといった麻帆良の住人に今現在千雨は傷つけられているということもその一因だった。

そしてその事実がいったん冷静さを取り戻しかけた千雨の怒りに火をつけ、再び真に向けて鋭い言葉を飛ばす。

「あんたはいいいさ、あんたの言う通りあんたはこの街に救われたってんだろっから　な」

そう言いながら千雨は真達を再びにらみつける。

「あんたはまだ理解してないみたいだから言うっておくぜ」
そう言うって千雨はいったん言葉を切るが、怒りで感情が高ぶっているのか彼女の目にはうっすらと涙が浮かんでいた。

「あんたが恩人だと言っている奴らが、この麻帆良の人間があたし

を嘔つき呼ばわりしてんだよ！」

そうやって叫びながら千雨は涙を流す。

ずっとため込んでいたものを涙とともに吐き出すかのように彼女は叫ぶ。

その嗚咽交じりの声は叫びという大きな声でありながら、恐怖より悲しみを呼ぶ色を備え、心を揺らす。

「クラスメイトも先生も近所の人も……父さんも、母さんもっ」

そう言っただけで彼女は力をなくしたかのようにうつむく。

悲しみに染まった涙は絶えることなく千雨の両頬を濡らし、彼女の中で澱んでいたものを言葉とともに外に流していく。

「悪口じゃ、ねえんだよ。私だって……」

そこで千雨の言葉は途切れる。

結局のところ千雨も麻帆良の人々が、クラスメイトや近所の人々、そして家族が好きだったのだ。

そして好きだからこそ、自分が受け入れられない現実には傷つき、弱い自分を守る仮面をかぶった。

本来ならうまくやっていけるはずだった。

しかし今日彼女は自分の悩みを理解してくれるかもしれない存在、希望を見出した。

しかしその希望は希望自身に打ち砕かれ、それとともに彼女のかぶっていた仮面もまた壊れてしまい弱い自分が顔をのぞかせる。

「私は……独りぼっちだ……」